



すずらん薬局高宮店の「健康教室」の様相

患者向けセミナー・教室を開こう

薬局の差別化、地域貢献を目指して

患者にとって、あなたの薬局はどんな場所だと思われるだろうか。「医師に聞けなかったことを相談できる場所」「薬についていろいろ教えてくれる場所」という評価を得ているだろうか。それとも、処方せんと薬を交換する「お薬交換所」と思われているだろうか。今月のスペシャルリポートは、「患者向けのセミナー・教室の開催」を取り上げた。これらは、患者や地域の人から一目置かれる薬局にする方法の1つにちがいない。

文・写真 河原由香里

地域の患者のための「健康教室」

すずらん薬局高宮店

すずらん薬局高宮店（広島県安芸高田市）は、年3回、患者向けに「健康教室」を開いている。

「健康教室」は、通常は休みにし

ている土曜日に13時～15時までの約2時間で行っている。テーマは、「糖尿病」「高血圧」「かぜ・インフルエンザ」など、患者に馴染みがあり、興味を持ってもらえそうなテーマを選んでいる。参加者にはスタッフが作成したテキストを配布。前半は、薬剤師が病態や薬について解説す

る。後半は、栄養士が栄養や食事について解説し、レシピなどを紹介。試食もしてもらっている。

小冊子のテキストを作成

「健康教室」の特徴の1つは、小冊子のテキストを作成していることだ。

スタッフは、教室開催日の2、3カ月前から準備を進める。テーマに関する資料を収集し、テキスト用に原稿を作成する。

例えば、「高血圧」のテキストでは、「血圧とは何か」「高血圧症の値とは？」「血圧が高いとなぜいけな



「健康教室」で活用しているテキスト

いのか」「家庭での正しい血圧の測り方」「高血圧の薬Q&A」など、病態や薬に関する情報をまとめている。このほか、「食生活のポイント」「外食の注意点」なども盛り込んでいる。

薬局長の小早川正和さんは、「健康教室」について、「若手の勉強の場になっています」と話す。テキスト作成にあたり、関連資料を集めたり、原稿をまとめる作業が若手薬剤師の勉強になっているそうだ。

若手の薬剤師が「健康教室」を担当する場合には、スタッフの会議などの際に「健康教室」で行う説明の予行練習をしてもらい、言い回しなどを工夫しているという。

参加者が体感できる

「健康教室」で参加者が試食する料理は、薬局の2階にあるキッチンで栄養士が調理し、提供している。

「参加者は高齢者が多いので、ただレシピを渡すだけでなく、試食をしてもらって味が分かれば、自宅でも調理してもらえるかもしれないと考えました」

管理栄養士の高畑江津子さんはこう話す。塩分などについては、味見をすることで、より伝わることもあるという。試食の時間には、参加者から質問が多く出される。自分自身

の食事について、「普段、こういうものを食べているが、それでいいのか？」など質問されるそうだ。

栄養や食事に関する説明では、いくつかのメニューを示して、参加者にカルシウムや塩分が多いと思う順番に並べてもらうなど、クイズ形式を取り入れて工夫している。

患者が抱えていた問題の発見に

薬局長の小早川さんによると、「健康教室」が患者が抱えている問題を新たに発見するきっかけになることもある。

例えば、「健康教室」で「嚥下障害」をテーマにした際には、開催の1カ月ほど前から、服薬指導の際に「飲み込みにくいことなどはありませんか？」と、薬剤師が患者に問いかけた。すると、嚥下で苦労している患者が予想以上に多いことが分かった。

また、「健康教室」は、似たような悩みを抱えている患者同士が参加者として出会い、話をする場にもなる。

ある参加者（患者）が「私は、医師の先生にこう言われたので、それを守って、こんなふうになっている」などと話すと、同じ内容を薬剤師が指導するよりも、患者にとっては説得力を持つこともあるそうだ。

医療、福祉、介護などに関する情報提供は医療従事者の責務

みつばち薬局

京都ファーマのみつばち薬局（京都府）は、2007年2月から、3カ月に1回のペースで、患者や地域の人に

情報提供する場として「医療懇談会」を開催している。

みつばち薬局の待鳳店、紫野店の2店舗を交互に会場とし、薬局が休みの土曜日午後を利用して実施している。

同薬局では、「医療、福祉などの情勢について情報提供することは、医療従事者の責務」と位置づけており、「医療懇談会」は、この考えに基づいて生まれた。

安心して医療を受けてもらうために

「患者さんは社会の中で生きています。医療や介護の制度、社会情勢を知っていただくことで、患者さんは安心して医療を受けられると思います。医療従事者として、自分たちの知っていることを患者さんに知っていただくことは責務だと考えています」

京都ファーマの代表取締役、津田羊子さんは、こう話す。

みつばち薬局は、薬のことに限らず、地域の人が生活の中で困ったことが生じた時に相談できる「窓口」という位置づけだ。

このような理念に基づき、「医療懇談会」は、2007年2月にスタートした。

医療、介護の制度、薬の知識などを説明

「医療懇談会」では、医療、介護の制度や、薬の知識などをテーマに取り上げている。テーマは、薬局のスタッフが患者と話している中で質問されたことや、患者が困っていると感じたことなどから選んでおり、



「キーさんのお薬相談室」の模様

1回の「医療懇談会」に2つのテーマを盛り込むことが多いそうだ。これまでの会では、「後期高齢者医療制度」「上手な薬局の活用方法」「お薬手帳」などをテーマに取り上げた。

また、薬局での待ち時間について患者に理解してもらう目的で、薬局内の見学も実施した。見学では、薬局内では安全のためにどのような仕事が行われているかを1つひとつ説明し、監査システムなどを見てもらった。

参加者からは、「こんなにチェックしてもらっているなら、時間が掛かるのは仕方ない」という声もあったという。

患者は話を聞く姿勢で参加

薬局では、服薬指導などで薬剤師が患者と話す機会はある。しかし、処方せんを持って来ている時は、患者に時間的な余裕がなかったり、他の患者が待っていたりすることなどから、患者がゆっくり話を聞いたり、相談できない状況もある。

京都ファーマの専務取締役、原龍治さんは、「医療懇談会には、患者さんが話を聞きにきていますので、薬局側も話をしやすいと思います」

と指摘する。「医療懇談会」は、服薬指導の場では伝えきれなかったことを患者に伝える機会になるようだ。

薬剤師はアピールを

津田さんは、「患者さんの持っている知識は、医療従事者が考えている以上に少ないと思います。医療や介護の制度についても、薬局のスタッフが知っている」と、患者さんから頼りにされると話す。

このため、薬剤師は、日ごろから、医療制度の議論や患者を取り巻く社会情勢についても情報収集し、しっかり知ることが必要だと考えている。

また、薬局で開催する患者向けのセミナーや教室などを通じて、「薬剤師は、自分たちの仕事や活動をアピールしてほしい」と期待している。

患者が和やかな雰囲気です話せる「茶話会」に

エスエルファーマシー

聖路加国際病院近くにあるエスエルファーマシー（東京都）は、「キーさん先生のお薬相談室」を開催し

ている。

「キーさん」というのは、薬剤師の木村茂次さんのこと。ゼネラルマネージャーの工藤美世子さんによると、患者の中にはベテラン薬剤師の木村さんを慕って来ている人も多く、日ごろから、木村さんとゆっくり話したいという雰囲気があると感じていた。そこで、患者が木村さんとゆっくり話ができる「茶話会」のような場をつくらうと考えたという。

患者が話したいことを話せる

「医師には言いたいことを言えないでいる患者さんも多いです。そういうことも含めて、患者さんが話のできる場だと思います」

「キーさん先生のお薬相談室」について、木村さんはこう説明する。

患者はそれぞれ、「言いたいこと」「聞きたいこと」を持っている。しかし、医師の前ではそれを言い出せないことが多い。薬局で薬剤師と話をする中で解消することもあるが、時間的な余裕がなく、ゆっくり話ができないこともある。そのため、「お薬相談室」は、木村さんと患者が和やかな雰囲気です話ができるような場として始めた。エスエルファーマシーは、アロマやハーブなども取り扱っており、店内でこれらの勉強会も開催している。月1回は、何かイベントを実施したい方針で進めており、「お薬相談室」は4カ月に1回のペースで開催している。

たまたま来店した人も

「お薬相談室」は、店内の待合いスペースを利用し、他の患者・顧客